

ちっぽいメ
村



powered by

村長

第二章

「ムクリどん。ムクリどん」

鹿児島である。

海を渡り、ここまで来た。ムクリに、黒潮など、通じはしない。大きく、迂回して、九州まで泳いできた。村長を背に乗せて。何度か、漁船の近くを通ったが、潮を上空にふかせば、事なきを得られた。

クジラだぞ、と村長は叫んでいたが、人間にはきこえなかった。

岬。がけの下で、いもを食べていた。

めずらしく、ムクリも、夢中で食べていた。いつものより、甘みが強い。

真夜中。海に出た。山のような、島。

「空気。空気」

頭上が、さわがしい。

村の扉を、閉めるからだ。ムクリは、そう思った。

村長は、屁がとまらないらしい。

大きな木の前。よくわからないが、ムクリは、見上げていた。そっと、触れた。かすかな、脈。なでる。生きている。

島の南側。平地を、歩いた。村長は、まだ時々動いている。

岩がむき出しの川原に出た。ムクリは、足場を確かめた。いけるか。

ふみ込む。跳んだ。そのまま、飛んだ。放屁。加速した。高度は、およそ五百メートル。落下する。水の中。音は、あまりしない。また、跳んだ。少し、楽しくなってきた。

シカと、目があった。騒ぎすぎたか。空。風をうけながら、そう思った。森の手前。地に、おりたった。

がらにもないことをしたな。

ムクリは、闇にまぎれた。

いつもの山奥。戻ってきたのだ。村長の屁も、とまっていた。

村の中。目を覚ますと、目の前に、自分がいた。

「お前、邪悪なるものだな」

ゆびをさした。

「ちがう。聖なるものだ」

「ふざけるな。きたならしい。表へ出ろ」

「侮辱する気か。貴様」

村長は、窓から、飛び出した。聖なるものも、続く。切り株の上。

「あんなところに、ピフテキが」

聖なるものが、叫んだ。村長は、あさつての方向を見た。

正面。聖なるものの、膝がとんできた。

間に合わない。腕を十字に組む。後ろへとんだ。そのまま、転がる。

「この、卑怯者め」

村長が、かまえた。左手は、あご辺りに。右手は腹につける。

「デトロイト・スタイルだと？」

「こう見えても、昔、アメリカにいたんだ」

数日前。ニューヨーク。

村長が、音もなく、距離をつめる。右のこぶし。弧を、描く。聖なるものは、上体をそらした。腕に、足をからませる。

体重を、預けた。村長は、かまわず、左腕をふり抜いた。

当たらない。倒れる。頭を、切り株にぶつけた。

聖なるものは、おどろいて、さがった。

「これで、村長も、聖なるものだな」

村長の口から、そろそろと、村長が出てきた。霊体である。

「いや、聖なる村長だ」

「邪悪なるものめ」

聖なるものが、駆けた。つまずいた。

村長の体。

「おい。触るな。外道」

霊体のまま、聖なるものを、なぐった。

村。

「何だ。夢か」

村長は、また、目を閉じた。ひどく、汗をかいている。

違う。ムクリは、そう思った。なかなかの、勝負だった。正義と悪。二つ合わせて、村長なのだ。

鳥が、鳴いた。ムクリは、立ち上がった。歩き出す。

くま。低く、うなる。

ちょうど、血がさわいでいたところだ。運がないな。くま。そう思った。

おいしそうなにおいで、村長は目覚めた。

顔や、手が痛い。ムクリが、肉を焼いていた。

「ちっぽけなべか。なつかしいな」

おもむろに、村長は肉にかじりついた。よくわからないが、何か、すがすがしい。ムクリも、そんな感じだ。まあ、いいか。そう思いながら、村長は、上を見た。くまの毛皮が、木にぶら下がっていた。

「もしかして、村長が、倒したのか」

そうに、ちがいない。村長は、高揚感につつまれながら、また、肉にかじりついた。

ムクリは毛皮を、着てみた。ちょうどいい。四つん這いになった。

本当に、くまのようだ。

「これなら、ムクリだと、ばれないな。よし、明日、もう一度、品川の駅へいこう」
得意気に、村長は、言った。

「おこのみやきに、白米だと。うまいのか。それは。おい、うまいのか。それは」
鬼気迫る村長の口の周りは、ソースだらけである。

大阪。单身、乗り込んだ。

思っていたより何倍も、あつい。目の前の鉄板から、とんでもない熱風が吹きあがってくるのだ。

「おい、押すなよ。人間。絶対に、押すなよ」

見上げる。もちろん、きこえはしない。

「新手か」

もんじゃである。目の前の鉄板が、だしのきいた甘い香りを放つ海に、のまれていく。

波が、手の届くところまできた。鉄板の、ふち。

少し、こげはじめ、さらに香りが増した。身を乗り出し、はがしとる。ソースを、つける。

「なんという、ことだ」

再び、手をのぼす。不意に、背中に、冷たいものを感じた。ジョッキ。押された。

「あちちちちち」

海の上を、駆ける。少し、食べた。右に、コップがみえた。

はねる。冰山。ぶつかる。水に、落ちた。

「押すなって言っただろ」

はい出してきた村長の口は、まだ、動いている。

「このかりは、いつか、かえしてやるぞ」

店の特製ソースをぬったもんじゃをかつぎ、店を出た。

もんじゃに、のる。風。

「食べられる船だ」

浮いた。さらば、大阪。

黒い、鳥。口をあけた。

食べられた。村長。

「なんでやねん」

[ちっぽけ音頭]

こんなちっぽけでも村長だ(それ！)

こんなちっぽけでも、村一つ(あ、よいしょ)

風に吹かれて、山をこえ、
空のかなたよりいざ参る。

ああ、偉大な村長よ。
ああ、偉大な村長よ。

(以下、すきなだけ繰り返す)